

恋しい 母は思い続ける

父を 捜して

【中】

オランダ日系2世の
戦後69年

オランダ南部のブレダ市。日系2世のロン・マイヤーさん(68)の父は「イサム・クニバ」という。母トウルースさん(85)の、忘れられない初恋の人だ。

断たれた日本行き

トウルースさんは、オランダの植民地だったインドネシアで生まれた。オランダ系白人とインドネシア系住民の血を引く。1942年に日本軍に占領された

後、16歳のとき、故郷スラウェシ島のマカッサルで「クニバ」と出会った。

10歳年上。海軍の白い服装だった。軍が女性や労働者を集めに来たときは、かくまってくれた。生活に必要なものを家に持ってきては、泊まるようになった。妊娠を告げると、喜んだ。だが、まもなく敗戦。「一緒に日本へ」と誘われたが、母が許さなかった。

「5年待つてくれ」。そう言って彼は去った。

トウルースさんは当時を振り返り、目を赤くした。ロンさんを産んだ後、オランダ人と結婚。日本軍の捕虜として働かされた長崎で被爆し、インドネシアに戻



①長男ロン・マイヤーさんの横で「クニバさんに会えたら、ただただしっかり見つめたい」と話すトウルースさん(左)＝オランダ・ブレダ市



②「父を憎んだり、恨んだりしたことはない。父のおかげで母が助かり、私がいる」と話すクラウディン・マイヤーさん(上)と母のオッテリンさん＝オランダ・スバイケニッセ

ってきた男性だった。一家は50年にオランダへ。新たに6子をもうけたトウルースさんは、ロンさんに「クニバ」のことを秘した。

ロンさんは46歳の時、原因不明の体調不良に苦しんだ。心理的な問題があるの

では、と医師に指摘された。継父につらくあたられた過去に思い当たった。

実子ではないのでは？
両親に問うと、実父は日

本人だと明かされた。「捕虜や民間抑留者を残酷に扱った日本人の子なのか？」

……。ショックだった。

98年、ロンさんは外務省の招きで、継父らと初めて日本を訪れた。市民との交流会で、継父は悲惨な捕虜時代のことや被爆の体験を語った。ひとりの日本人男性が「私の父の世代が、あ

なたにしたことを許してもらえますか」と頭を下げた。「忘れないが、許します」。継父は言った。つらくあたられたわけが、理解できた。自分が日本人の子だったからだ。だが、「自分も継父と同じように、許そう」と思った。3年後、継父は亡くなった。

日本人の子隠さず

ロッテルダム郊外に住むクラウディン・マイヤーさん(69)の実父は、東部ジャワのポンドウオソで働いていた「ヤスシ・コウロ」。

母のオッテリンさん(88)が、日本軍に命じられたというインドネシア警官に連行されかかっているところを通りかかり、保護してくれた日本人だ。

当時40歳ぐらいだったという「コウロ」は、オッテ

リンさんの家族を気遣い、食料を運んでくれた。44年秋に生まれたクラウディンさんを「マサコ」と名付け、抱いた。しかし敗戦。日本へ一緒に行くことを望んだオッテリンさんに「日本に家族がいる」と告げた。困った時のためにと、寶石などを置いていった。

5年後、オッテリンさんはオランダ人と結婚したが、娘が日本人の子であることは隠さなかった。「コウロさんは私を救ってくれた。彼がいなかったら、私は慰安婦になっていた」

一家で61年にオランダへ。70年代からコウロを捜し続けている。「マサコ」の宝物は、父が残した、鳥をかたどった金と真珠のペンダント。今も身につけ、ぬくもりを感じている。

(編集委員・大久保真紀)